

１０月のグローバルウィークⅡの様子

ともしび
共生委員会ニュース

2019 年度　4 号

2019 年 11 月 02 日版

68 期平和共生論文　代表論文題目一覧

301　O.K.　マイノリティの生きやすい社会へ　―法整備と偏見解消の両観点から―

302　N.Y.　時代と共に生き続ける歌舞伎　―歌舞伎が生む平和・共生とは―

303　U.R.　この地球にフェアトレードは存在するのか
―虚飾に満ちたフェアトレードに対して消費者ができること―

304　T.M.　平和主義を選んだ日本は自衛隊に何を望むのか
―平和そして安全保障を踏まえて―

305　M.K.　映画が伝えるメッセージ　―「LGBT」の歩み―

306　K.R.　日本の子どもの貧困を断ち切るために

307　U.Y.　人といのちの関わり　―犬・猫の殺処分ゼロを目指す意義―

308　K.Y.　宗教による対立構造　―宗教対立をなくすために何ができるか―

309　K.M.　貧困のサイクルを断ち切るための教育の重要性

310　M.Y.　安楽死導入国オランダからみえてくる安楽死尊厳死法制化の是非

フィリピン訪問プログラム　参加者募集中！

◎期間：２０２０年３月２０日（金）～２６日（木）　◎定員：５名

◎費用：１８０，０００円　◎申込締切：２０１９年１１月１２日（火）

☞関心のある人は、地歴公民科・藤本先生まで。（選考には作文、面接があります）

知ることで守られる子どもの権利

HR304 N.Y.

小さい時に父親の友人がくれ、僕の人生を変えた一冊の絵本があります。『地雷ではなく花をください』。幼稚園にも入らないくらいの頃にもらった絵本でした。アフガニスタンで、自分と同じような年代の子どもが、大人たちが引き起こした戦争の地雷によって足を無くしたり命を落としたり、とても苦しんでいるという内容でした。その中にどうしても忘れられないセリフがあります。「生命が助かっただけでもよかった」。本当にそうでしょうか。これは脚と両親を失った女の子が病院のベッドの上でおじさんに言われた言葉です。脚も、両親も失ったこの子にとってどれだけ 衝撃的で悲しい言葉でしょうか。

子どもって大人の言うこと聞かなきゃいけないの?

僕が小学校に入る前からずっと考えてきたことです。 子どもにも、ものを言う権利があるのではないでしょうか。同じように世界には声をあげたくてもあげられない子どもが数え切れないほどいます。例えば、親が薬物を買って使うために子どもが働かされたり、家が極貧で子どもが学校になんか行っている暇があれば働いた方がマシだと働かせられたり、借金の担保として劣悪な環境の工場で寝ることもできず食べることもできず、働かせられたり。もしかするとあなたが着ているそのシャツは、子どもが学校に行けずに大きな農場で摘んだ農薬まみれのコットンからできているかもしれません。実際に子どもの小さく器用な手はコットンを摘むのに最適で、昔から使われています。

学校に行けずに、と書きましたが、学校に行けないのは何が問題でしょうか。字が読めない、計算ができない、一般的な教養が得られないなど。まだまだありますが、これらは貧富の格差をさらに大きくしてしまいます。字が読めないとどうなるか、例えば、身近なことで言えば、私たちが毎日左手に持つスマホが使えない、もっと問題なのは貧困のサイクルが止まらないことです。字が読めるということは、言うまでもなくさらに上の学校へ行くことの条件です。いい学校に行けば、いい会社に勤めていいお給料を得ることができます。しかし学校に行ったことのない親は学校に行く必要性を認識しないので行かせなかったり、途中でやめさせたりします。また女の子だからという理由で学校に行けない子どももいます。最後まで通わなかった 子どもはいい職業につけず、いい職につけた人との差はさらに広がります。こうして貧富の差は縮まらないのが世界の現状です。



僕は、こうした子どもたちの現状を知ってもらうために、この現状を子どもたちの手で変えようと活動しています。
大人たちの子どもには何もできないという考えを壊すために活動しています。子どもの権利が守られていない現状が世界にも私たちの周りにも存在します。「無関心」や「無知」であることは同時にそうした現状を放置し、さらに悪化させているということを知らなければなりません。知ることで一歩を踏み出すきっかけになります。『子どもの権利条約』と インターネットで調べてみてください。大人には都合が悪いかもしれない、でもきっと守られていない私たちの権利、もっと下の世代の権利があるはずです。遠い国に住む知らない隣人に手を差し伸べることは勇気がいるかもしれない。でも、あなたにしかできないアプローチがあるはずです。

６９期修学旅行夏休み課題　紹介

69 期（2 年生）では、修学旅行に向けた夏休みの課題として「身近な方への戦争体験インタビュー」あるいは「身近な街の戦争体験調査レポート」を行いました。その中から 3 名の報告をご紹介します。

《戦争体験インタビュー①》

HR210　I.M.

今回のインタビューで一番印象に残ったのは祖父が兵隊学校に行った兄との面会の時の話である。以前とは違う兄の体型や軍隊の制服を見て、当時 3 歳の祖父は子供ながらに、もう会えなくなるかもしれないという不安や恐怖を感じていたと思う。また、この話をしているときに、祖父が涙を流してしまったのを見て、家族や親戚、友達に二度と会えなくなるという怖さや悲しさと同時に、そのような心配がなく過ごすことができる今の環境にありがたみを感じ、自分も涙が出そうだった。

祖父が住んでいたところは田舎だったため、疎開はせず、家族と一緒に暮らせていたわけだが、家族がバラバラにならずにいられるというのも当時は幸せなことであったのだと思う。食事はさつまいもが主で肉は年に 2、3 度しか食べられなかったという。魚・肉・野菜など自分が好きな時に好きな量だけ食べられる現在とは比べ物にならないくらい質素な食事であったことに驚いた。また、祖父の兄が軍隊に行く前と後を比べると、その体型の違いは明白で、食糧や物資が国民ではなく兵士達に優先的に費やされてきたことがわかる。祖父の見せてくれた兵隊学校の集合写真の一人一人の顔をよく見ると、皆それぞれ表情が違っていて、それぞれの思いがあると思うと、17 歳ほどの少年たちに兵士をさせるべきだったのかと考えるものがあった。

祖父の家は都市の水戸に向かう飛行機の通り道であったため、いつも多くの飛行機が頭上を通っていたという。私の家も成田空港に向かう飛行機の通り道ではあるが、それとは全く違う恐怖感があったと思う。祖父と戦争の話をするのは今回が初めてで、当時の状況や祖父の心情を知ることができて良かった。実際に戦争を体験した人が少なくなっている中、自分から話を聞き、伝えていくことが私達の役目だと思う。

《戦争体験インタビュー②》

HR204　M.K.

戦争を体験した人から直接話を聞くことで、より戦争というものが鮮明に形を持った事実として見えてきた。おかしな言い方かもしれないが、「本当にあったことなのだ」と感じた。何の義理があって私たちとそう年齢の変わらない若い命が兵隊となり、自分の人生を投げ打って戦いに行かなければならなかったのか。何のために大事な家族や友達と離れて見知らぬ土地で銃を握りしめなければならなかったのか。考えるだけで悲しくて悔しくて仕方なかった。今更どんなに悔やんでも惜しんでも何千万という人の命は返っては来ない。一人ひとりが描くはずであった物語は全部途中のまま虚しく葬られている。どれほど生きたかったか、そう考えると胸が張り裂けそうになる。

どんな理由があったにせよ戦争は過ちであるというのは周知の事実だ。だが恐ろしいことにこの過ちが繰り返されないという保証はどこにも無い。戦争を体験した人がどんどん減っていく中、私たちに何ができるだろうか。具体的に２つ考えた。

１つめは私たち一人ひとりが戦争に加担しないという強い意志を持つことだ。戦地で銃を持ち戦う勇気などはいらない。誰に何と言われようと銃を手にしない勇気を持つことが大切だし、よっぽども勇敢だと思う。

２つめは、ニュースを見て時事問題に興味を持つことだ。インタビューに答えてくれた私の祖父は、新聞やテレビのニュース、ネットニュースなどをよく見るようで、政治や国際関係のことをよく知っている。また、それらに対して自分の考えもきちんと持っている。自分が国民である、平和の担い手であるという意識が高いと思う。誰かがやってくれるではなく、誰もが当事者であることを忘れてはいけない。そのためにも周りのことや社会のことに興味を持つことから始めなければいけないと思う。

そして、「平和」は意識して守っていかなければその概念すら廃れてしまうから、今の自分の境遇を当たり前に思わないことが大切だと感じる。戦争のないこの国を、世代を超えて守り続けたいし、世界で未だ行われている戦争についても深く考え、できることやすべきことを探していきたいと思う。他人事ではない。

《身近な街の戦争体験調査》

HR209　I.S.

昭和16年12月8日に始まった太平洋戦争で、江戸川区は昭和19年11月24日に、東小松川3丁目、西一之江2丁目や春江町などが初めて被害を受けたそうだ。東京大空襲の時は江戸川区内では松川1～4丁目、逆井1～2丁目、平井1～4丁目一帯が壊滅的な被害を受けた。特に小松川、平井地区は区内第一の商店街を有する木造住宅の密集地域であったため、延焼により一帯は焦土と化した。その他、東小松川2、4丁目、西小松川1丁目、小島町2丁目、工場のあった東篠崎町が被害に遭った。この時の江戸川区内の死者は約800名、負傷者約5，800名、全焼家屋約11，000戸、被災者は約40，000名にのぼり、中川新橋から約100メートル上流付近で死者が最も多く「中川新橋の下は死体で川の水が見えなかった」と言われている。

今回の調査で僕が感じたことは、戦争は意外と自分の身近にあったということである。これまでの太平洋戦争のイメージというと、日本で全国的に被害があったのだろうという程度のものだった。しかし、実際に調査を進めていくと、自分が住んでいる街のかつての様子が明らかになっていくと同時に、いかに戦争に対する認識が甘かったのかを思い知らされた。僕が最も驚いたのは、前に挙げた「中川新橋の下は死体で川の水が見えなかった」という記述である。これは死者が800名、という「データ」よりもイメージがつきやすい。僕たちは普段数字だけを見て頭で処理してしまうことが多いが、このような「体験」を知ることがどれ程大切かということがわかった。

他にもたくさんの「体験」を資料から得られたので、この調査は有意義なものになった。また、自分の住んでいる街だけでも知らなかったこと、驚いたこと、感動したことが数多くあったので、今後どんどん範囲を広げて戦争を忘れない必要があると感じた。